



興福寺

国宝誕生と復興の物語

発見！天平の美

興福寺の歴史と 藤原氏

藤原鎌足の延命を願い、山階寺（興福寺）の建立を願い出た正妻・鏡女王は、天智天皇のかつての妃であった。鎌足の後を継承した、息子藤原不比等は山階寺を平城京に「興福寺」として移築、そして不比等、妻橘三千代、孫の聖武天皇・娘の光明皇后へ引き継がれ、やがて栄光の藤原家の氏寺として発展する。
表紙画像は、NHK 番組から

CONTENTS

【第1章】藤原氏の原点と山階寺の誕生

- 1-1. 宿命の誕生と乙巳の変（いっしのへん）
- 1-2. 鏡女王（かがみのおおきみ）の発願と山階寺の起源
- 1-3. 「藤原」という姓

【第2章】平城遷都と「藤原の寺」の確立

- 2-1. 宿命の子・藤原不比等の台頭
- 2-2. 藤原氏の成立と平城京への大動座
- 2-3. 初期伽藍の造営と不比等の死

【第3章】聖武天皇・光明皇后が描いた地上浄土

- 3-1. 聖武天皇の祈りと東金堂の深藍
- 3-2. 光明皇后の覚悟と天平の塔
- 3-3. 橘三千代の死と西金堂の奇跡

【第4章】平安の春日一体と、うごめく「僧兵」の影

- 4-1. 藤原冬嗣による中心伽藍の完成
- 4-2. 神仏習合：春日大社との一体化
- 4-3. 興福寺勢力の政治兵器「神木動座」と「山階道理」

【第5章】道長との暗闘、そして半独立王国への道

- 5-1. 摂関政治の頂点と興福寺の絶対的主権 興福寺別当・定澄との大紛争（1001～1006年）
- 5-2. 貴族化する子院と「院家」の成立

【第6章】治承四年の悪夢「南都焼討」

- 6-1. 平氏政権への反逆の炎

6-2. 平重衡、大和路を突進す

6-3. 「鹿の角も焦げぬべし」全山焼亡の惨劇

【第7章】焼け跡からの覚醒と鎌倉幕府の邂逅

7-1. 源頼朝の政治的思惑と「造国制」の始動

7-2. 混迷の造営事情と山田寺仏頭強奪事件

【第8章】慶派仏師・運慶が刻んだ「新しい美」

8-1. 焼け跡に現れた天才・運慶

8-2. 北円堂の奇跡：無著・世親立像

【第9章】武家政権の圧迫と、近世享保の大災禍

9-1. 戦国の狂風と織豊政権の刀狩り

9-2. 享保二年の災禍：再興なき近世最大の悲劇

【第10章】近代の奈落「廃仏毀釈」から現代の奇跡の復興へ

10-1. 明治維新、そして寺号剥奪の奈落

10-2. 西大寺・佐伯泓澄の奮闘と復号の光

10-3. 現代：中金堂再建と令和の120年ぶり大修理

法相宗大本山 興福寺不屈の伽藍が紡ぐ 千三百年の興亡史

【第1章】藤原氏の原点と山階寺の誕生

1-1. 宿命の誕生と乙巳の変(いっしのへん)

興福寺の歴史を紐解くことは、日本の古代・中世の政治を支配し続けた「藤原氏」の栄枯盛衰をたどることに他ならない。その原点は、推古天皇 22 年（614）、大和国高市郡藤原の地（現在の奈良県橿原市付近）に生を受けた一人の男、中臣鎌足（藤原鎌足）に始まる。中臣氏は代々、朝廷の神事・祭祀を司ることを家職とする伝統的な氏族であった。鎌足もまた、その厳格な家職を継承する立場にあり、本来であれば神道の伝統を守る保守的な官僚として生涯を終えるはずであった。しかし、時代はそれを許さなかった。当時の朝廷では、蘇我蝦夷・入鹿の親子による専横が極まり、皇室の権威を脅かすほどに肥大化していた。若き鎌足は、この現状に強い危機感を抱く。彼は密かに政権転覆の志を立て、同志を求めた。そこで目をつけたのが、聡明で知られた中大兄皇子（天智（てんじ）天皇）である。

二人の出会いは蹴鞠の場であったと伝えられる。皇子の脱げた靴を鎌足が拾って捧げたその瞬間から、日本の歴史を根底から変える固い盟約が結ばれた。皇極天皇 4 年（645）、鎌足は中大兄皇子、そして蘇我一族でありながら反主流派であった蘇我倉山田石川麻呂らと結託し、宮中にて蘇我入鹿を暗殺。翌日には蝦夷を自害に追い込むという、世に言う「乙巳の変」を断行した。これによって蘇我氏の本宗家は滅亡し、軽皇子（孝徳天皇＝皇極天皇の弟）を擁立した新政権が発足。鎌足は新設された「内臣（うちつおみ）」の要職に就き、中大兄皇子の右腕として「大化の改新」という国家大改革の烈風を巻き起こしていく。

「乙巳の変」画



1-2. 鏡女王(かがみのおおきみ)の発願と山階寺の起源

中大兄皇子と鎌足の精神的・政治的な絆は、生涯にわたって揺らぐことはなかった。しかし、天智天皇8年(669)、鎌足は重い病に伏し、死の床につく。この時、夫・鎌足の命を救いたい一心で、堂塔の建立を願い出たのが、鎌足の妻・鏡女王であった。鏡女王はかつて天智天皇の正妻(または妃)であり、のちに鎌足に譲られたという経緯を持つ当時の最高権力者たちを魅了した至高の女性である。彼女は夫の病氣平癒を深く祈念し、仏殿の建立を強く発願した。当初、伝統的な祭祀氏族としての先祖を持つ鎌足は、異国の神である「仏」に頼ることを躊躇したが、鏡女王の献身的な願いに、その許可をする。そして、山背国宇治郡山階(現在の京都市山科区)の地に、壮麗な仏殿が建てられた。これが、のちの大本山興福寺の前身である「山階寺(やましなでら)」である。この山階寺の堂内には、鎌足がかつて蘇我氏打倒の血風の中で、その大願成就を誓って発願し、のちに密かに造立を進めていた「釈迦三尊像」と「四天王像」が厳かに安置された。神道の家系であった鎌足が、実は政敵・蘇我氏の信仰基盤であった「仏教」の力を深く畏怖し、自らの悲願を託していたという歴史の皮肉がここに隠されている。「山階寺」という名は、鎌足を尊崇する藤原一族にとって極めて神聖な響きを持ち、のちに移転を繰り返して「興福寺」となった後も、「山階寺」という呼称は、その精神的ルーツを示す「別称」として、永く尊ばれることとなる。

1-3. 「藤原」という姓

天智天皇8年10月16日、鎌足はその波乱に満ちた生涯を閉じた。その死の直前、鎌足の臨終が極めて近いことを悟った天智天皇は、国家への不滅の功績に対する「特別な褒賞」を授けた。それが、人臣最高位である「大織冠」の冠位、そして「内大臣(うちつおおみ)」の地位、そして何よりも、彼が生まれ育った地名にちなんだ新しい姓、「藤原」の賜与であった。これまでの「中臣」という神事の氏族から脱却し、天皇を直近で支える至高の政治貴族としての独立を認めるという、天智天皇から生涯の忠臣への、最後のそして最大のメッセージであった。鎌足の子、不比等はこの時わずか11歳。父が死の直前に賜ったこの「藤原」という新しい姓を、誇りとともにその小さな肩に継承することとなる。

【第2章】平城遷都と「藤原の寺」の確立

2-1. 宿命の子・藤原不比等の台頭

鎌足が遺した息子たちの中で、長男の貞慧（定恵とも＝じょうえ）は学問を深く愛する極めて聡明な人物であり、若くして出家して唐に留学した。しかし、帰国後、将来を嘱望されながらも惜しくも夭逝してしまう。結果として、藤原の血脈と政治的野望のすべては、次男である不比等の双肩に係ることとなった。父を亡くした時、弱冠11歳であった不比等は、少年期を不遇のうちに過ごした。天智天皇の崩御後、皇位継承を巡って日本中を震撼させた大内乱「壬申の乱（672）」が勃発したからである。この乱によって、鎌足の盟友であった天智天皇の系統（弘文天皇＝大友皇子）は敗北し、大海人皇子が「天武天皇」として即位。都は近江から再び飛鳥の地へと引き戻された。この政変の荒波の中で、鎌足ゆかりの山階寺もまた、飛鳥への移転を余儀なくされる。大和国高市郡厩坂（現在の奈良県明日香村）の地に移された寺は、その地名をとって「厩坂寺」と呼ばれるようになった。不比等は、天武天皇の統治下では息をひそめるように実力を蓄え、持統天皇の朝廷に至ってついにその天才的な政治手腕を現し始める。彼は文武天皇の治世下において、刑部親王（おさかべしんのう）と共に、日本という国家の骨格となる「大宝律令（701）」の撰定を主導。

法治国家としての「日本」をデザインした最高権力者へと登り詰めていく。

『大織冠像』（奈良国立博物館蔵）室町時代 「藤原鎌足」中央 向かって 右/貞慧 左/不比等



2-2. 藤原氏の成立と平城京への大動座

文武天皇 2 年（698）、不比等は歴史的な政治工作を成功させる。朝廷をして、「藤原の姓は、鎌足の正統な後継者である不比等の子孫のみが名乗るべし。その他の中臣系一族は元の姓に戻るべし」という至上命令を下させたのである。ここに、単なる一氏族の姓であった「藤原」は、不比等直系のみが独占する最高特権階級のブランドとなり、名実ともに「藤原氏」がこの世に成立した。不比等は家祖としての地位を不動のものとしたのである。さらに不比等は、皇室との重層的な婚姻関係（外戚政治）を構築していく。夫人・加茂朝臣比売との間に生まれた娘・宮子を文武天皇の夫人へと入れ、大宝元年（701）、のちの聖武天皇となる首皇子を誕生させる。さらに、継室である県犬養橘宿禰三千代との間には、同じ年に安宿媛（あすかべひめ：光明皇后）をもうけた。自分の孫と娘を、未来の天皇とその后にするという、壮大なグランドデザインがここに完成しつつあった。和銅元年（708）、元明天皇により平城遷都の詔が発せられる。この時、大納言から右大臣へと昇進した不比等は、遷都計画の事実上の最高責任者であった。不比等は 50 歳という当時としては老域に達していたが、その権勢は天下を圧していた。和銅 3 年（710）、平城京への遷都が実行される。それは、国家の機能だけでなく、諸大寺の大移動をも意味していた。不比等は、自身の精神的支柱であり、藤原氏の権威の象徴である氏寺・厩坂寺を、平城京の「春日の勝地（景勝の地）」へと移建することを決意する。ここに寺名は、「天下を興し福を授ける寺」「興福寺」と改称されたのである。



平成 30 年(2018)に再建落慶を迎え復元された「中金堂」。

669 年藤原鎌足の病氣平癒を祈願（山背国山階）主尊として釈迦三尊像 脇侍四天王像

672 年壬申の乱に伴う飛鳥への都戻り（大和国厩坂）興福寺

710 年平城京遷都に伴う藤原不比等による移建（現在地）主尊として釈迦如来丈六仏像（中金堂）

2-3. 初期伽藍の造営と不比等の死

興福寺の境内地は、左京三条七坊という、平城京を一望できる東の丘陵地（現在の奈良公園一帯）に画定された。しかし、平城京全体の条坊整備の遅れもあり、興福寺の本格的な伽藍建設は遷都後も数年にわたって続けられた。和銅7年（714）、最初を中心堂宇である「金堂（現在の中金堂）」が完成に近い姿を見せ、盛大な供養が営まれた。この初代金堂には、飛鳥から運ばれた釈迦丈六仏像（立像であれば4m80cm）を中心に、十一面観音菩薩像2軀、薬王・薬上菩薩像という絢爛豪華な諸尊が並び、藤原氏の圧倒的な財力を見せつけた。建物を建てる際、地の神を鎮め、永年の安全を祈るために、床下に金銀、宝石、ガラス玉などを埋める「鎮壇具」の儀式が厳かに行われた。これら金銀の鎮壇具は近代になって発掘され、当時の最高峰の工芸技術と、藤原氏の並々ならぬ執念を今に伝えている。

しかし、伽藍の完成を見ることなく、養老4年（720）8月、藤原不比等は薨去する。10月、朝廷は「造興福寺仏殿司」という臨時の官庁を設置した。一介の氏寺（私寺）の建設のために国家の官司が動くというのは、日本の歴史上極めて異例のことであった。不比等のため、元明太上天皇と元正天皇は長屋王に命じて、不比等の慰霊のための「円堂（北円堂）」を創建させた。不比等の一周忌にあたる養老5年（721）8月3日、北円堂は完成し、須弥壇には弥勒仏が安置された。さらに、悲しみに暮れる妻の橘三千代（光明皇后の生母）もまた、夫の追善のために「弥勒浄土変像」を造らしめ、金堂に奉納した。興福寺は、名実ともに平城京の「四大寺」の一角として、国家の庇護を受ける巨大寺院へと膨れ上がっていった。

＊平城四大寺（平城京移転時） 大安寺、元興寺、薬師寺、興福寺

＊南都七大寺 東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺

＊本朝・四箇大寺（しかだいじ） 東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺

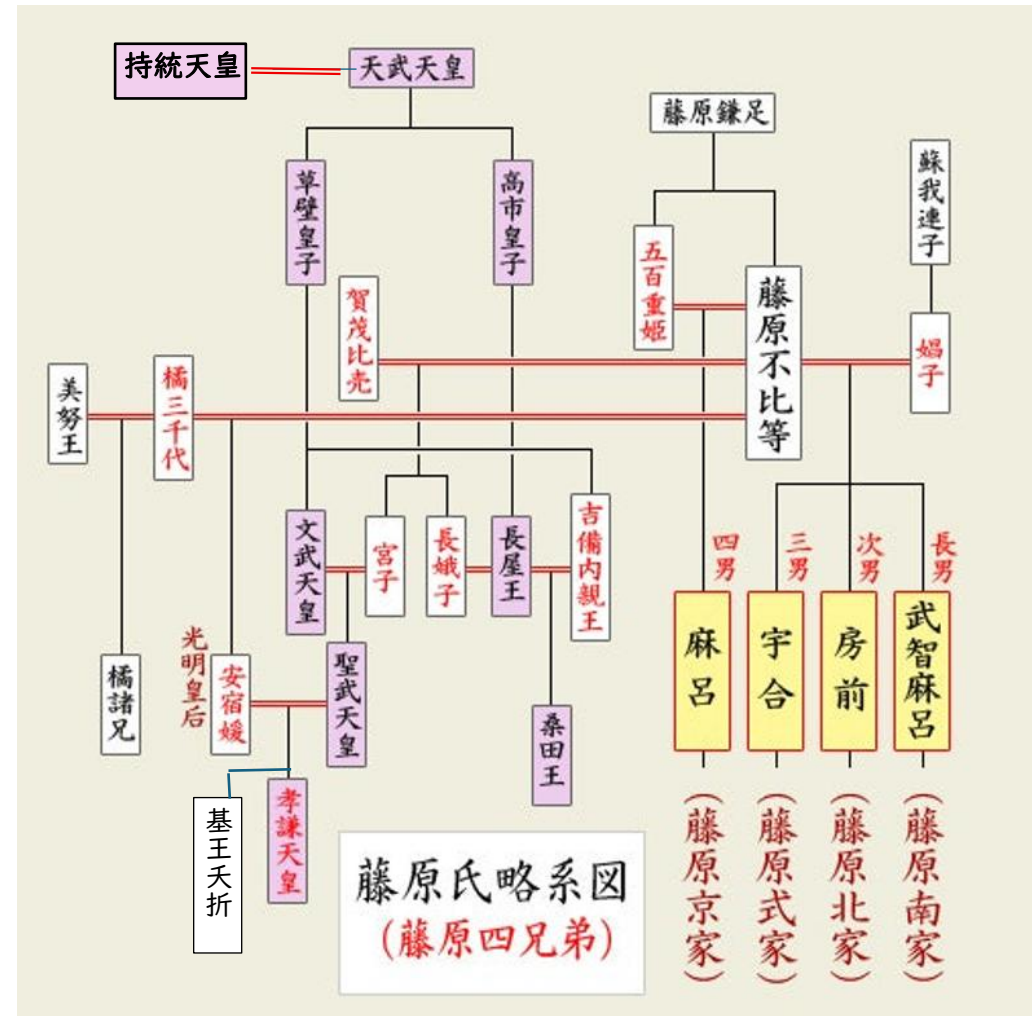
＊右図・金堂鎮壇具（ちんだんぐ）は、寺院や堂塔を建立する際に、地の神を祀るための儀式で地中に埋める物品。奈良時代に、興福寺や東大寺などで多くの鎮壇具が制作された。発見されたこれらには金銀や宝石、玉類などが含まれている。





国宝・北円堂八角円堂、本瓦葺八角一面 4.9m

藤原不比等の一周忌の養老5年(721)元明・元正天皇が、長屋王に命じて建てさせた。平城京を一望の下に見渡すことのできる1等地で、平城京造営の推進者であった不比等の霊を慰める最良の場所である。治承4年(1180)の被災後、承元4年(1210)頃に再建された。華麗で力強く、組物に三手先斗栱(さんてさきときょう)が使われるなど、創建当初の姿をよく残しており、内陣の天井には中央の大蓮華より光を放つ天蓋が輝き、組物間の小壁ある彩色された笈形(おいがた)が特徴的。現在の堂内には本尊である弥勒如来坐像を中心に、運慶作の無著(むじゃく)・世親(せしん)菩薩立像をはじめとして、木心乾漆四天王立像などが安置されている。



【第3章】聖武天皇・光明皇后が描いた地上浄土

3-1. 聖武天皇の祈りと東金堂の深藍

神亀元年（724）、不比等の孫である首皇子が即位し、聖武天皇となった。藤原氏の血を引く初めての天皇の誕生であり、不比等の息子たちである「藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）」が朝廷の要職を占め、藤原氏の覇権が確立されつつあった。即位から2年後の神亀3年（726）、聖武天皇は、叔母であり先代の天皇でもある元正太上天皇の病氣平癒を深く祈念し、興福寺の境内に新たな仏殿を建立することを発願した。これが、現在も国宝として立ち続ける「東金堂」である。東金堂の本尊として造立されたのは、あらゆる病と苦しみから衆生を救うとされる「丈六の薬師如来像」であった。その周囲には、日光・月光菩薩、文殊・普賢菩薩、四天王像、十二神将像などが隙間なく配置され、まさに病魔を退散させるための強力な霊的空間が構築された。

東金堂 薬師如来三尊 中金堂の東側にある金堂で、東金堂と呼ばれる西向きのお堂。その後5度の被災・再建を繰り返し、現在の建物は室町時代の応永22年(1415)に再建された。前面を吹き放しとした寄棟造で、組物である三手先斗栱(みてさきときょう)が多用されるなど、創建当初の奈良時代の雰囲気の色濃く伝える。堂内は室町時代に造立された本尊薬師如来坐像を中心に、日光・月光菩薩立像、文殊菩薩坐像、維摩居士坐像、十二神将立像、四天王立像などが安置されている。

この東金堂の特筆すべき点は、その床面の美しさであった。須弥壇の周囲には、水波の紋様が刻まれた美しい深藍色の「瑠璃埴（るりせん：ガラス釉質のタイル）」が敷き詰められていた。堂内に一歩足を踏み入れると、まるで薬師如来が住まう東方浄瑠璃世界の「青い海」の上に立っているかのような、息をのむほどに華麗で幻想的な荘厳が施されていたのである。



3-2. 光明皇后の覚悟と天平の塔

しかし、藤原氏の独走に待ったをかける存在がいた。皇族勢力の巨頭・長屋王である。四兄弟との激しい政争の末、神亀6年（729）2月、長屋王は「謀反の企てあり」との讒訴（無実の告発）を受け、軍勢に包囲されて自害に追い込まれた（長屋王の変）。長屋王が非業の死を遂げた直後の8月、元号は「天平」へと改められる。そして、不比等の娘・安宿媛（あすかべひめ）が、従来の「皇后は皇族出身に限る」という不文律を破り、人臣（臣下の家系）として初めての皇后、「光明皇后」の座に就いた。これは藤原氏による権力掌握の完成であると同時に、怨霊の恐怖や国内の疫病、政治的不安との戦いの始まりでもあった。

皇后となった光明子は、自らの権威を示すため、そして亡き父・不比等の追善と

国家の安寧のため、天平2年（730）、興福寺に飛びぬけた規模の「五重塔」の建立を発願する。「高き塔を建てて、仏の教えをあまねく

天下に知らしめん」その意志のもと、全国から木材と職人が集められ、わずか1年足らずという、当時の建築技術からは驚異的とも言えるスピードで五重塔が天空へと立ち上がった。塔の初層には、東方薬師如来、南方釈迦如来、西方阿弥陀如来、北方弥勒如来（菩薩）の四方浄土変像が安置され、平城京のどこからでも見えるその巨大な塔は、光明皇后の権力の象徴であり、民衆の信仰の灯台となった。



3-3. 橘三千代の死と西金堂の奇跡

天平5年(733)1月、光明皇后の最愛の生母であり、不比等の妻として宮廷を裏から支配した橘三千代がこの世を去る。母の死に大きな衝撃を受けた光明皇后は、その菩提を弔うため、東金堂と対をなす西側の地に「西金堂」の建立を決意する。この造営は、皇后直属の役所である「皇后宮職(こうごうぐうしき)」が総力を挙げて管轄した。記録によれば、投入された人員は延べ5万5,000人、費用は2,000貫文以上、そして仏像の表面を覆うために、20石9斗1升という天文学的な量の「漆」が使用された。母の一周忌に合わせて完成した西金堂の内部は、天平文化の最高峰の美の結晶であった。釈迦三尊像の周囲を囲むように配置されたのが、麻布を漆で固めて造られた軽量で写実的な「乾漆八部衆像」と「十大弟子像」である。その中の一体が、国宝・阿修羅像である。母を失った光明皇后の深い悲しみ、そして長屋王の呪いや激しい政争に耐え抜く彼女の張り詰めた精神性が、あの仏像たちの切なくも気高い表情となって結実したのである。天平16年(744)頃までには、講堂、食堂、僧房、南大門、中門、回廊が全て揃い、興福寺の広大な中心伽藍がここに完成を見た。

旧西金堂の再現 と興福寺八部衆



【第4章】平安の春日一体と、うごめく「僧兵」の影

4-1. 藤原冬嗣による中心伽藍の完成

奈良時代後期から平安時代初期にかけて、都が長岡京、そして平安京へと遷っても、興福寺の重要性はいささかも揺らがなかった。それどころか、朝廷を完全に掌握した藤原北家の躍進とともに、寺はさらなる黄金期を迎える。弘仁4年(813)、藤原北家の実権を握った藤原冬嗣が、興福寺の境内に壮麗な八角円堂である「南円堂」を創建した。この南円堂の建立をもって、古代から続いてきた興福寺の中心伽藍のパズルは完全に完成した。その壮大華麗な景観は、国家が建てた正式な「官寺(東大寺や大安寺)」と比較しても全く遜色のない、いやそれらを圧倒するほどの威容を誇るようになった。平安貴族の頂点に立つ藤原氏は、膨大な富を氏寺である興福寺へと注ぎ込み、その庇護のもと、寺は「南都(奈良)の最高峰」としての地位を固めていった。

建設当初のこの堂は、基壇築造の際には地神を鎮めるために、和同開珎や隆平永宝を撒きながら築き上げたことが発掘調査で明らかにされた。また鎮壇には弘法大師空海が大きく関わったことが伝えられている。当時の興福寺は藤原氏の氏寺でしたが、藤原氏の中でも摂関家となる北家の力が強くなり、北家の内麻呂・冬嗣親子ゆかりの南円堂は興福寺の中でも特殊な位置を占めた。本尊である不空罽索観音菩薩が身にまとう鹿皮(ろくひ)は、神に仕える鹿への信仰、つまり氏神である春日社との関係により、藤原氏の強い信仰を集めた。現在の建物は創建以来4度目のもので、寛保元年(1741)に立柱、寛政元年(1789)に再建された。再建には古代・中世の北円堂などの円堂を参考にしたと考えられているが、正面(東)には間口1間・奥行2間の「拝所」があり、唐破風(からはふ)が付いているなど、江戸時代の細部様式もよく表している。

南円堂 「西国三十三所」の第九番札所



4-2. 神仏習合：春日大社との一体化

興福寺の歴史において、最も特異で強大な力を生み出したのが、隣接する「春日大社（春日社）」との結合である。春日大社は、神護景雲 2 年（768）、（孝謙天皇重祚して）称徳天皇の勅命により、藤原永手らが藤原氏の氏神（武甕槌命など）を祀るために創建した神社であった。

＊注（武甕槌命（タケミカヅチノミコト）は、日本神話に登場する雷神・剣神で、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）の主神としても祀られている）。伝説では、武甕槌命が白鹿に乗って常陸国鹿島神宮から降臨したとされ、これが神鹿の由来となり、現在も奈良公園周辺に約 1300 頭の鹿が神の使いとして保護されている。

氏寺である興福寺と、氏社である春日社は、同じ藤原氏をバックボーンに持つため、ごく自然に急速な「神仏習合」の道を歩み始める。興福寺の学僧たちは、「春日明神（神）は、我が法相宗（仏教）の教えを擁護するために現れた臨時の姿（垂迹）である」という「本地垂迹（ほんじすいじゃく）思想」を大々的に唱えた。天暦元年（974）には、興福寺の僧侶が春日社の社頭に赴いて堂々と読経を行い、神社と寺院の境界線は完全に消滅した。保延元年（1135）に「春日若宮」が創設されると、興福寺による春日社の完全な支配構造が確立。春日社の神主や神人（じにん）たちは、興福寺の事実上の傘下に入り、この強力な神仏習合の信仰形態は、明治維新の廃仏毀釈に至るまで約 900 年間も持続することとなる。

毎年 1 月 2 日、春日大社に興福寺の僧侶が参拝し、神前で「日供始」と呼ばれる儀式を行う。僧侶たちは「般若心経」や「唯識三十頌」といった教えを読経し、仏教と神道の融合を象徴する。今でも、興福寺と春日大社の歴史的な関係を反映し、神仏習合の姿を今に伝える貴重な機会となっている。

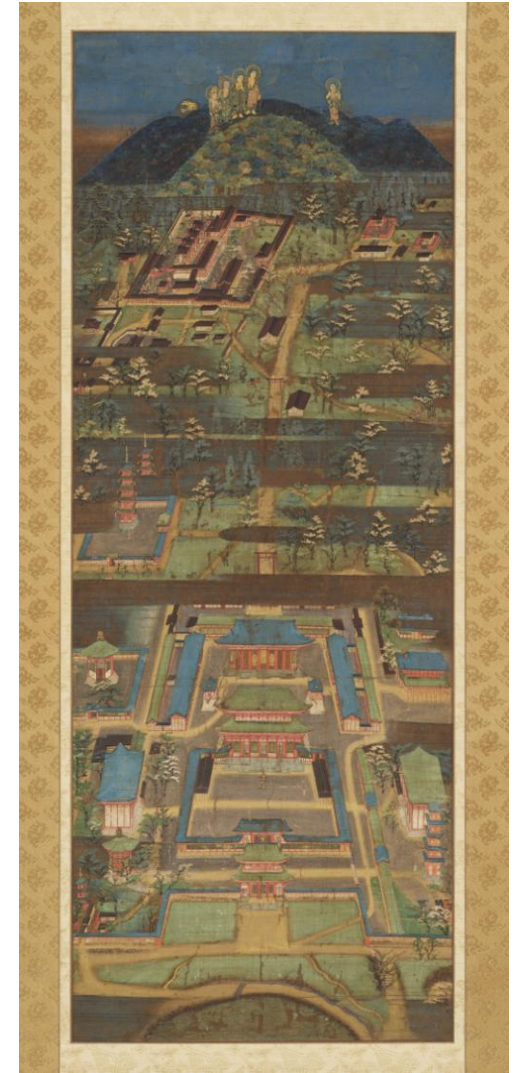


重文 金銅春日神鹿御正体
細見美術館蔵



4-3. 興福寺勢力の政治兵器「神木動座」と「山階道理」

この「神と仏の一体化」は、単なる宗教論争にとどまらず、朝廷を震撼させる最強の政治的武器へと変貌した。それが「神木動座」による「入洛強訴」である。興福寺の僧侶たちは、朝廷や他氏族との領地（荘園）争い、あるいは人事権を巡る不満が生じると、春日大社の神木（榊の木に神鏡をかけたもの）を神輿に奉じて、武装した大量の「僧兵」とともに京都の朝廷へと押し寄せた。当時の天皇や貴族たちは、神の祟りを何よりも恐れていた。白河上皇をして「賀茂川の水、双六の賽、山法師（比叡山の僧兵）、これぞ我が心にかなわぬもの」と言わしめたが、南都の興福寺もまたそれ以上に恐るべき存在であった。神木が京都に運び込まれると、貴族たちは恐怖のあまり政務を放棄し、興福寺側の要求を丸呑みせざるを得なかった。これを世の人は、道理が通らなくても藤原氏の氏寺・氏社の要求なら押し通るという意味を込めて、「山階道理（やましなどおり）」と呼んで自嘲した。例えば寛治7年（1093）、近江国（滋賀県）の春日社領の荘園を巡り、近江守・高階為家の部下が神人を暴行するという事件が起きた。激怒した興福寺の衆徒は神木を動座させて朝廷に強訴。為家の即流罪を強要し、力づくで土佐国へと配流させた。このような、神の権威を盾にした恐喝まがいの強訴・入洛は、記録に残るだけでもおよそ70回に及び、朝廷の権威を失墜させ、のちの武士台頭の伏線となっていた。



右図 春日社寺曼荼羅図

左図 藤原道長 紫式部日記による

【第5章】道長との暗闘、そして半独立王国への道

5-1. 摂関政治の頂点と興福寺の絶対的主権 興福寺別当・定澄との大紛争(1001～1006年)

摂関政治の最高潮は藤原道長(966～1027年)の時代である。「この世をば 我が世とぞ思う 望月の 欠けたることも 無しと思えば」と詠んだ道長は、朝廷において絶対的な権力を誇っていた。

道長と興福寺の間の緊張感が最高潮に達したのが、長保3年(1001)から寛弘3年(1006)にかけて起きた、興福寺別当(最高責任者)・定澄との大紛争である。事の発端は、大和国内における興福寺領の荘園と、朝廷の国司(受領)との間の激しい利害対立であった。朝廷の裁定が興福寺にとって不利であると感じた別当・定澄は、激怒して自ら僧兵の先頭に立った。定澄は、道長に対して「要求が受け入れられなければ、3,000人の武装僧兵で京都の道長邸(宇治殿や土御門殿)を完全包囲し、力づくで要求を呑ませる」と、堂々たる脅迫を行ったのである。さしもの道長も、この宗教勢力の凄まじい軍事力と、春日明神の崇りの恐怖を前にしては、全面衝突を避けるしかなかった。道長は慎重に交渉を重ね、興福寺側に一定の譲歩を示すことで、辛うじて僧兵を奈良へと退去させることに成功した。この事件は、道長がどれほど政治の頂点に立とうとも、興福寺という聖域の主権を侵すことはできなかったという動かぬ証拠であり、興福寺が単なる藤原氏の「お抱えの寺」ではなく、独自の意思を持った恐るべきモンスターへと進化していたことを物語っている。

5-2. 貴族化する子院と「院家」の成立

平安時代中期以降、興福寺の繁栄はさらに加速し、境内・境外を問わず「子院(高僧たちの住居兼寺院)」が乱立するようになった。これらの子院の間で次第に階級(格差)が生じ、摂関家や公卿の血を引く貴族の子弟が次々と入寺するようになる。これにより、「院家(いんげ)」と呼ばれる特権的な子院が成立し、興福寺の内部は急速に貴族化していった。その最高峰に君臨したのが、「一乗院」(天禄元年(970)定昭によって開設)と「大乘院」(応徳4年(1087)隆禅によって開設)という二大門跡である。皇族や摂関家の子弟が代々住職を世襲する「貴種相承」の場となり、江戸時代末期に至るまで、奈良の政治・宗教・経済を牛耳る絶対的な二大権力機関として君臨する。

【第6章】治承四年の悪夢「南都焼討」

6-1. 平氏政権への反逆の炎

平安時代の末期、鳥羽・後白河法皇による院政の混迷の中で、新興武士勢力である「伊勢平氏」が急速に台頭する。平清盛は娘の徳子を高倉天皇に入内させ、生まれた子の安徳天皇を擁立。かつての藤原氏のお家芸であった外戚政治を武力の力で奪い取り、朝廷の実権を完全に掌握した。この平氏の専横に対し、古代以来の伝統を守る保守的な貴族社会、そしてその象徴である藤原氏の氏寺・興福寺の不満は爆発寸前であった。京都を拠点とする平氏は「新興の軍事政権」であり、巨大な荘園と独自の武力を維持する南都（奈良）の興福寺や東大寺とは、利害が根本から激突していたのである。治承4年（1180）、ついに歴史の導火線に火がつく。後白河法皇の皇子である以仁王が、源頼政とともに平氏打倒の令旨を全国に発した。この令旨は平氏に不満を持つ各地の源氏、そして南都の僧兵たちに向けられた救国のメッセージであった。興福寺の僧兵たちはこの令旨に熱狂的に呼応。「平氏の悪徒を討つべし」と叫び、数千の武装兵を組織して京都に向けて進軍を開始した。これは平清盛にとって、単なる僧兵の反乱ではなく、国家の精神的権威そのものが牙をむいてきたという、底知れぬ恐怖の瞬間であった。



平清盛像 六波羅蜜寺蔵

6-2. 平重衡、大和路を突進す

清盛の怒りと焦りは凄まじかった。「南都の反乱勢力を根絶やしにせよ」治承4年12月、清盛は自身の五男であり、勇猛果敢な猛将として知られた平重衡を総大将に任命し、数万の大軍を奈良へと派遣した。治承四年（1180）12月28日の激突。平氏の軍勢は奈良の北の玄関口である般若坂を突破。興福寺・東大寺の僧兵たちも必死の抵抗を試み、奈良の街頭は血で血を洗う凄惨な戦場と化した。しかし、訓練された平氏の正規軍の前

に、僧兵たちの防衛線は次々と崩壊していく。夜が迫る中、重衡の軍勢は奈良市街へと乱入した。

6-3. 「鹿の角も焦げぬべし」全山焼亡の惨劇

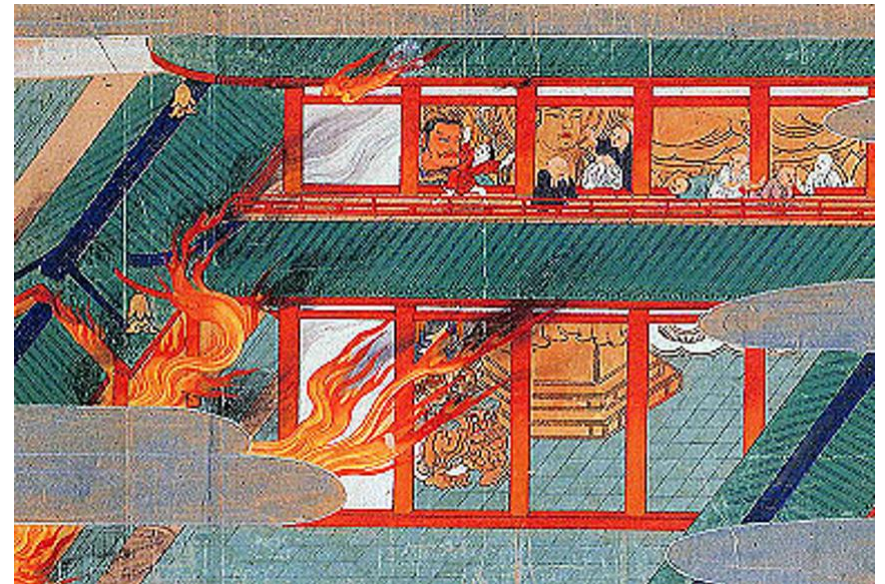
そして、運命の瞬間が訪れる。暗闇の中、戦況を有利に進めるため、あるいは僧兵たちの視界を奪うために、平氏の兵（あるいは一説に風に煽られた失火）が放った火の手が、大和の強風に乗って一気に燃え広がった。乾燥した冬の夜風に煽られた炎は、またたく間に奈良の街を、そして日本仏教の聖地を飲み込んでいく。興福寺の広大な境内は、一瞬にして火の海と化した。藤原鎌足以来、不比等、聖武天皇、光明皇后が富の全てを投じて築き上げた天平の至宝、大伽藍が、凄まじい轟音とともに崩れ落ちていく。時の公卿・九条兼実はその日記『玉葉』に、「一国これ滅亡」と書き付け、そのこの世の終わりを絶望とともに記録した。

また、後世の『平家物語』は、この時の惨状を次のように生々しく描写している。「南都焼けて、鹿の角も焦げぬべし」翌朝、煙が立ち込める焼け跡に残ったのは、無残に黒焦げになった地面と、崩壊した堂宇の柱の残骸だけであった。

興福寺：中金堂、東金堂、西金堂、五重塔、南円堂、北円堂を含む、主要伽藍のほぼ全てが全焼。

東大寺：大仏殿が崩壊し、天平の大仏は無残にも融解。

数百年にわたって積み上げられた南都の宗教的権威と政治的影響力は、この一夜にして物理的に壊滅したのである。



【第7章】焼け跡からの覚醒と鎌倉幕府の邂逅

7-1. 源頼朝の政治的思惑と「造国制」の始動

南都焼討の暴挙は日本中の怒りを買い、平氏滅亡へのカウントダウンを早めることとなった。治承・寿永の乱（源

平合戦）を経て、平氏は壇ノ浦に沈み、時代は武士の世、鎌倉時代へと突入する。この焼け野原となった大和の地に、いち早く救いの手を差し伸べたのが鎌倉幕府を開いた源頼朝であった。頼朝にとって、興福寺の再建を支援することは、単なる慈善事業ではなかった。「平家に焼かれた南都を救う正義の味方」としての正統性を天下にアピールするため。朝廷貴族の象徴である藤原氏（九条家など）との関係を修復・維持するため。奈良に潜む強力な武士団や僧兵残党を、再建の恩義によって手懐けるため。頼朝の強力な後押しにより、国家を挙げた大規模な復興プロジェクトが始動する。諸国の税収を特定の寺社再建に割り当てる「造国制」が敷かれ、公家（朝廷）、藤原氏、そして興福寺自身の三者が一体となって、天平の伽藍を蘇らせるための執念の作業が始まった。

7-2. 混迷の造営事情と山田寺仏頭強奪事件

しかし、源平合戦の直後であり、日本中が困窮していたため、復興への資金や資材の調達は遅延を極めた。建物は何とか建ち上がっても、その中に安置する肝心の「仏像（本尊）」を造るための金銅や職人が圧倒的に不足していたのである。この状況に、極限まで業を煮やした興福寺・東金堂の「衆徒（僧兵たち）」が、日本の歴史上、前代未聞の暴挙を犯す。文治3年（1187）3月9日、興福寺の武装僧兵たちは、飛鳥の地にある古刹・山田寺に大挙して押し入った。そして、山田寺の薬師三尊像の神聖な本尊（天武天皇の時代に造立された白鳳文化の最高傑作）を、力ずくで台座から引き剥がし、奈良の興福寺へと強引に運び去ってしまったのである。

この驚くべき「本尊強奪事件」は、当時の興福寺の権勢がいかに朝廷の法を超越していたか、そして「何が何でも氏寺を復興させる」という彼らの狂氣的なまでの執念を象徴している。強奪された白鳳の薬師如来像は、その後、応永18年（1411）に東金堂が再び焼失するまで、興福寺の本尊として堂々と祀られ続けた。この時、奇跡的に火災の灰の中から顔の部分だけが救い出されたものこそが、現在、興福寺国宝館の至宝として知られる「銅造仏頭（国宝）」である。



【第8章】慶派仏師・運慶が刻んだ「新しい美」

8-1. 焼け跡に現れた天才・運慶

興福寺の鎌倉復興において、日本の文化史上に最大の奇跡をもたらしたのが、新進気鋭の仏師集団「慶派」の巨匠、運慶の登場である。天平の洗練された、しかしどこか現実離れした貴族的な仏像たちが灰燼に帰した大和の地で、運慶とその父・康慶らは、全く新しい思想のもとに仏像を刻み始めた。それは、台頭する武士たちの力強さ、生身の人間のリアリティを泥臭いまでに追求した「写実主義」の誕生であった。興福寺は彼らにとって、自らの芸術の可能性を試す最大のキャンバスとなった。運慶は、失われた諸尊の再興に全精力を傾け、次々と驚異的な名作を焼け跡から生み出していった。

8-2. 北円堂の奇跡：無著・世親立像

運慶の生涯における最高傑作であり、日本の彫刻史上最高峰とされるのが、興福寺北円堂の本尊の脇に佇む「無著（むじゃく）・世親（せしん）立像（国宝）」である。無著・世親像は4～5世紀のインドの法相宗の高僧老僧の深い慈悲、すべてを見透かすような静かな眼差しの兄「無著」、そして、鋭い知性、内に秘めた強い意志、何かに抗うような弟の「世親」の動的な表情、この2体の像は、麻布や漆の天平仏とは異なり、日本の豊かな山林から切り出された寄木造の木像である。その表面に施された衣服の皺の質感、今にも言葉を発しそうなリアルな口元、そして何よりも、水晶を目の裏からはめ込む「玉眼」の手法によって、仏像の瞳に人間の生々しい「魂の輝き」を宿らせることに成功した。北円堂の中に立つこの像の前に佇むと、現代の私たちでさえ、800年前の鎌倉時代ではなく、1600年前のインドの天才思想家が目の前に生きて呼吸しているかのような錯覚に囚われる。運慶は、木の中に仏を閉じ込めるのではなく、木の魂を解放して生きた人間を彫り上げたのである。



8-3. 祈りは、古代の氏寺から中世の武家社会へ

運慶が興福寺で展開したこの力強い芸術は、東大寺南大門の「金剛力士像」へと繋がっていく。血管が浮き出、筋肉が躍動するその姿は、平氏の洗練された貴族文化を叩き潰した鎌倉武士たちの美意識と完全にシンクロしていた。運慶の活躍により、興福寺の伽藍は、かつての「古代藤原氏のプライベートな祈りの場」から、「中世武士政権の圧倒的なエネルギーと結びついた、新たな美の聖地」へと完全なる脱皮を遂げた。その後、興福寺は建治3年（1277）、嘉暦2年（1327）、文和5年（1356）、応永18年（1411）と、中世を通じて何度も火災に見舞われるが、そのたびにこの不屈の精神と慶派の美意識によって、不死鳥のように元の姿へと復興を繰り返していく。

【第9章】武家政権の圧迫と、近世享保の大災禍

9-1. 戦国の狂風と織豊政権の刀狩り

室町時代が終わり、激動の戦国時代を迎えると、興福寺の半独立的な栄華にも暗雲が立ち込め始める。大和国（奈良県）には強力な守護大名が存在せず、長年にわたり興福寺が事実上の国主として君臨していた。しかし、そこに乱入してきたのが、戦国の梟雄・松永久秀である。久秀は奈良の地に「多聞城」（正倉院近く）を築き、武力によって大和を支配。永禄10年（1567）10月には、久秀の軍勢と三好氏の合戦の煽りを受け、東大寺大仏殿が再び炎上するという大惨劇が起き、興福寺も戦火の恐怖に常に晒された。やがて、足利義昭を奉じて京都に乱入した織田信長が覇権を握ると、宗教勢力への容赦ない弾圧が始まる。比叡山延暦寺を焼き討ちにした信長は、南都の興福寺に対しても厳しい検地を断行し、それまで寺が不当に維持していた膨大な荘園・寺領の削減を厳しく迫った。信長亡き後、天下を統一した豊臣秀吉は、さらに苛烈な検地（太閤検地）と「刀狩り」を実行。これにより、興福寺が平安時代から誇っていた最強の暴力装置である「僧兵」は完全に武装解除され、牙を抜かれることとなった。文禄4年（1595）の秀吉の検地により、春日社と興福寺の知行（財政基盤）は、わずか2万1,000余石と定められた。かつて数力国分の富を誇った大寺院は、一地方の小大名の経済規模へと縮小させられたのである。この知行高は、その後の徳川幕府（江戸時代）によっても据え置かれ、辛うじて面目を保つのみの時代が続いた。

9-2. 享保二年の災禍：再興なき近世最大の悲劇

武家政権による経済的・軍事的な封じ込めに苦しむ興福寺に、近世における最大にして致命的な火災が起きる。江戸時代中期の享保2年（1717）正月、境内の子院から発生した失火は、激しい冬の強風に乗って興福寺の中心伽藍を容赦なく襲った。講堂・僧房・中金堂（伽藍の核）回廊・中門・南大門・西金堂（阿修羅像がおかれた堂宇）・南円堂、これらが一堂に激しい炎に包まれ、灰燼に帰した。かつて治承の平氏の焼き討ちの際には、藤原氏の富と鎌倉幕府の全面支援によって速やかな復興が可能であった。しかし、2万1,000石の貧乏寺へと転落していた江戸時代の興福寺に、往時の大伽藍を蘇らせる体力は、もはや残されていなかった。徳川幕府もまた、自らの財政難から、一寺の再建に大金を投じることとはしなかった。復興計画は絶望的なまでにストップした。八角円堂の南円堂が、寛保元年（1741）にようやく立柱（再建）に漕ぎ着けたものの、お寺の本尊を安置すべき最重要堂宇である「中金堂」の本格的な再建はついに叶わなかった。文政2年（1819）、全国の篤志家（民間）からのささやかな寄進によって、本来の姿とは程遠い、小規模で極めて簡素な「仮堂」が建てられたのみで、江戸時代は幕を閉じる。かつての天平の威容は、完全に失われたままであった。

【第10章】近代の奈落「廃仏毀釈」から現代の奇跡の復興へ

10-1. 明治維新、そして寺号剥奪の奈落

享保の大火からの傷が癒えぬまま、興福寺は1300年の歴史の中で最も凄惨な、文字通りの「全滅の危機」を迎える。明治元年（1868）、新政府によって発せられた「神仏分離令」、およびそれに伴う狂氣的な「廃仏毀釈」の嵐である。平安時代から900年間、春日大社と一体となって大和を支配してきた興福寺の信仰形態は、根底から全否定された。興福寺の権力の源泉であった最高位の子院「一乗院」や「大乘院」の門跡をはじめ、数多くいた高僧たちは、生き残るために仏門を捨てて還俗させられた。彼らは興福寺の僧侶ではなく、春日大社の「新社司（神職）」へと鞍替えし、昨日まで拝んでいた仏像に背を向け、神道を祀る立場へと変わったのである。さらに明治3年（1870）の太政官布告により、境内地以外のすべての土地を国家に没収される「上知（あげち）」が執行された。興福寺は経済的な命脈を完全に断たれた。お寺の周囲を囲んでいた美しい築地塀は叩き壊された。僧侶たちの住居であ

った無数の諸坊は解体され、二束三文で民間に払い下げられた。宗名・寺号の公称も禁止され、「法相宗大本山興福寺」の名は日本の公の記録から完全に消滅した。実質的な「廃寺」である。この時、主を失った境内の五重塔が、民間にわずか「25 円（現在の価値で数万円～十数万円程度）」で売りに出され、買い取った者が金具を剥ぎ取るために薪として焼き払おうとしたが、周囲への延焼を恐れた近隣住民の反対によって辛うじて免れた、というあまりにも有名な伝承（噂）が流れるほどの、文字通りの奈落の底に興福寺は沈んだ。

10-2. 西大寺・佐伯泓澄の奮闘と復号の光

無住の荒れ寺となり、仏像たちが埃に埋もれる中、興福寺の灯火を消すまいと必死の延命に動いた者がいた。明治 8 年（1875）から同 15 年にかけて、近隣の奈良西大寺の住職であった佐伯泓澄（おうちょう）が、兼任という形で興福寺の臨時管理者に就任した。佐伯らは、新政府や大和の旧臣たちに対して、「鎌足以来の歴史を持つこの聖地を滅ぼしてはならない」と、血を吐くような再興の嘆願書を何度も提出し続けた。その執念の実が結び、明治 14 年（1881）、ついに「興福寺」という寺号の復号が明治政府より許可される。翌年には管理権が正式に興福寺へと返還され、かつて神職に転向していた元僧侶たちの一部が再び仏門へと戻ってきた。中金堂の敷地が返還され、国の文化財保護政策の黎明（明治 30 年の国宝指定開始）とともに、建造物や傷だらけになった天平・鎌倉の仏像たちの本格的な修理が始まった。興福寺は、絶滅の淵から奇跡的に息を吹き返したのである。

10-3. 現代：中金堂再建と令和の 120 年ぶり大修理

20 世紀から 21 世紀にかけて、興福寺の歩みは「かつての天平の大伽藍の完全復元」という、壮大な挑戦の歴史となった。昭和 34 年（1959）、廃仏毀釈の混乱から守り抜いた阿修羅像や仏頭などの至宝を安全に保管・公開するた



め、近代的な「宝物収蔵庫（現・国宝館）」を建設。世界中から観光客が集まる奈良のシンボルとしての地位を確立する。

平成3年（1991）、学識経験者を集めた「興福寺境内整備委員会」が発足し、平成10年（1998）に「興福寺境内整備構想」という、壮大なランドデザインが策定された。国家補助事業として、中金堂跡地や南大門跡地の徹底的な発掘調査が行われ、床下から奈良時代の至宝（金堂鎮壇具）が次々と発見され、往時の華麗な記憶が科学的に裏付けられた。

1998年：「興福寺境内整備構想」策定

2018年：「中金堂」再建・落慶

そして平成30年（2018）、そのハイライトが訪れる。享保2年（1717）の焼失以来、実についぞ本格的な復元が叶わなかった伽藍の核、「中金堂」が、天平の姿そのままの壮大な木造建築として、301年ぶりに奈良の天空へと堂々と再建・落慶されたのである。さらに興福寺の挑戦は終わらない。第2期境内整備事業と平行して、令和4年（2022年）からは、明治35年（1902）以来、実に120年ぶりとなる「五重塔」の本体大規模解体修理に着手。現在、塔の周囲は巨大な素屋根で覆われ、未来の100年、200年先へとその不屈の木造建築の命を繋ぐための、令和の大修理が精力的に進められている。

鏡女王の祈りから始まり、不比等の野望、光明皇后の悲しみ、僧兵の驕り、平重衡の炎、運慶の魂、そして廃仏毀釈の奈落。興福寺の一千三百年の歴史は、幾度灰になろうとも、その都度人間の情熱によって必ず立ち上がる、「不屈（フェニックス）」の精神の証明そのものなのである。

※「興福寺ホームページ」の資料より一部抜粋

文責：さんさん会（芦屋川カレッジ33期）・同好会 さんさんヒストリア リーダー 小林 猛